

## 多言語エッセイ 第1話 「この言語はどうよ? (1) 英語」 文/井上孝夫

新型コロナウイルスなどという厄介なものが流行したせいで、当講座も中断の憂き目を見ているわけですが、考えてみれば多言語学習などというものは本来一人で行うしかないものであり、この講座に申し込まれた皆さんとは、必ずしも直接対面しなければ交流ができないわけではありません。

今「人が集まる」こと自体がリスクと見なされている現状で、ただズルズルと講座延期をしているだけではちょっと癪ですよね。感染拡大の嵐が収まるまでなんとかこの講座も「どっこい生きている」というところを見せつけてやりたいものです、コロナの奴に。

そこで考えました。何か多言語学習にまつわるあれこれをエッセイ風にした雑文を書いてお届けする、というようなことが出来ないかと。

本講座では、世界の言語の概観を、実感を以てとらえて頂きたい、それがすべての出発点になると考えてプログラムを作って参りました。それは今後も変わりませんが、今回は、もっと守備範囲をゆるく拡げて、「色々な言語を学んで感じたこと、各言語への私なりの感情、そしてそれに伴って考えた言葉全般についての私の意見」といったものを述べてみようかと思いました。もちろんこれは私の個人的意見や感覚・感情が入っているものですから、「同意できない」とか「共感できないよ!」といった声もあるでしょう。でもそんなものでしょう、言葉の問題というのは。少なくともコロナ禍が沈静化するまでの暇潰し、と言って悪ければ、ちょっとした慰めくらいにはなるんじゃないでしょうか。

題材はアットランダムに選びますが、具体的言語についての感想は毎回入れようと思っています。私のブログ(「言語のある生活」)で述べたことと重なる所も多いでしょうが、同じ人間の書いていることですから、そこはご容赦願います。

それでは第1回。

● [この言語はどうよ？ (1) 英語]

英語についていまさら概論的なことを言っても始まらないので、この言語が世界の言語の中でどういった特色を持った言語なのかについて述べようかと思えます。

まず発音。実は英語の発音は難度が中程度の部類に入るのではないかと思います。しかしスペリングと発音の対応の極端な不規則性は、世界の言語の内でもかなり難しいものと言ってよいでしょう。

しかし英語の発音を考える際に、はたして辞書などに表記されている発音記号は正確なものなのか、という基本的問題があるような気がします。

これに関連して言いますと、発音記号 [r] で表される音は、言語によって、また英語の内部でもさまざまなヴァリエーションがあります。それでは発音記号と呼べないではないか、という声が聞こえてきそうです。

実はそのとおりなんです。語学本や各言語の辞書で使われている発音記号というのは、じつは国際音声文字とはかならずしも合致していない場合があります。

例えば国際音声文字で [r] と記されるのは舌先を歯茎のあたりで震わせる trill と呼ばれる音（日本語の「べらんめえ口調のラ行の音」）であって、英語の r は舌先を歯茎に向けて立ててその後前へ倒して発音する [ɹ] という音です（red [ˈɹed]）。場合によっては trill の下の震えが一回だけの音 [r] となることもあります（merry [ˈmɛri]）。しかしこれらの違いを考慮していたら収拾がつかないので、英語の内で簡単に表記できるように [r] としてしまおう、というわけです。

同じようにフランス語では r の文字を、口蓋垂（俗称「のどちんこ」）での摩擦音 [ʁ] または人によって同一個所の震え(trill)音 [r]（シャンソン歌手エディット・ピアフの r はこの音です）を表すのに使います（parler [paʁle~parle] [話す]）。イタリア語では標準的には国際音声文字と同じ発音の [r] です（個人的な差異としてフランス語と同様の発音をする人もいます）。

ややこしい話ですが、多言語を学ぼうとすると、このあたりの理解が必要になりますので、ちょっと述べさせてもらいました。

英語では tl とか tn とかの発音も [tl]、[tn] とは違う発音を実際にはしています。こちらへんはあまりにも細かくなりますので、ここでは割愛させてもらいます。

スペリングの問題は、英語の弱点でもあり、もしかすると長所でもあります。もちろん音と文字の対応が規則的ならば覚えやすいし、学習能率も上がるでしょう。しかし一方で、外国語の語彙を取り入れる時に困難が発生する。音韻の体系が違うために、単純に写し取れな

いのです。日本語で外国語のカタカナ表記で悩まされるのもそのせいです。

その点、英語はもともと文字と音の対応に無頓着なところがあるので、言語のスペリングをそのままにして（同じアルファベットを使う言語が多いせいもあって）、読み方は曖昧にして済ませる、ということを平然とやる。こういういいかげんさ、よく言えば鷹揚さが、英語を世界共通語的な地位に押し上げるのに一役買っているかもしれません。しかし後世の学者が英語の現在の表記から発音の研究をするのは非常に困難でしょう（発音記号の入った辞書が奇跡的に残されていれば別でしょうが）。

さて文法的には英語はどうか。一言で言うと、適度に簡略化された、比較的学びやすい言語だと申し上げたい。

まず、動詞の活用のうち、人称による形の違いが無くなりつつある。現在形は多くの動詞で3人称単数が -s、-es を取る以外は同一形であり、過去形では人称・数にかかわらず同じである（be 動詞の was、were は除く）。未来形は will に動詞原形（to 無し不定詞）を後続させるだけ、他の活用も似たようなものです。

ゲルマン語派の北欧語（デンマーク語、ノルウェー語・スウェーデン語）などはさらに進んで、各時制で人称・数にかかわらず単一の形が用いられるようになっていきます（古形は除く）。英語もそれに似た現象が起こっています。将来はどうなるのでしょうか。

名詞や形容詞も格変化が消滅していますから（わずかに所有形の -'s、-s' や代名詞類に残る）簡単です。複数形も古形の名残りの不規則複数形以外は -(e)s を付ければよい、というふうに単純化されています。

これは複雑な性・数・格による変化を持つ言語から見ると実にシンプルです。格変化は前置詞を使った構文に置き換えられました。

中国語のような語形変化が無い言語の方が簡単ではないか、と言う方がおられるかもしれませんが、そういう言語では逆に語順の縛りがきつくなったり、多くの慣用表現を必要とするという現象が起こります。文法要素のうち、ある部分を簡略化すると別の部分が複雑化するという法則があるような気がします。それらのバランスが比較的良好に取れているのが現在の英語ではないか、というのが私の個人的見解です。

現在事実上の国際共通語となっている英語ですが、今後の変化は予測困難です。まず昔と違ってインターネットなどのデジタル通信が発達した環境では、言語の変化にそれらがどう影響するのか定かではありません。固定化に向かうのか、あるいは逆に様々な英語の変種が飛び交うカオス状態に近付くのか、ちょっと見当が付きませんが大変興味を惹かれるところではあります。

（この項終わり）